

第一回 WEB 国際会議（2011 年 10 月 15 日開催）

～全体討論～

村上先生 シュテンガーさん、ありがとうございました。これから全体討論に移るんですけども、予定の時間を超えてしまっていますので、手短にしたいと思います。私が一番今日印象深かったことは、ウィーンと東京、パリと東京というのは何千キロと離れているわけです。それで、パリとウィーンは何百キロぐらいの離れ方ですけども、何千キロのほうが近くて、何百キロのほうが遠いような印象を受けました。とてもフッサール哲学とデカルト哲学が話し合うというのは難しいことだなという印象を強く受けました。そう言っても仕方がないことですので、ちょっと映りが悪いんですけども、鏡を1つ用意しようと思います。それは、ライプニッツがデカルトと批判している、その内容です。これはライプニッツが1677年にある人に宛てた手紙の中で言っていることです。書簡の中です。ライプニッツはデカルトが論証（*demonstratio*）によって議論を進めるという場合に、むしろ省察（*meditatio*）によって読者を導くと言っています。そういうふうにライプニッツはデカルトを批判するわけですけども、一つは、まず、カンブシュネルさんにご質問することは、**Mathesis** というのがそのまま形而上学には当てはまらないとおっしゃいました。それは、一旦方法にならなければいけないとおっしゃったと思います。その場合に、形而上学の方法というのは、ライプニッツの言うような論証と省察を併せ持っている、統合したようなものになるのかどうかというのが、ご質問したいところです。

それから、シュテンガーさんにもご質問申し上げますので、そのあとでお答えいただきたいと思います。シュテンガーさんには、ライプニッツのデカルト批判を考えてみて、とてもお答えにくいことかもしれないですけども、フッサールの哲学というのは、もともとのところはデカルトの道と言われていたものですけども、その省察と論証、その2つのタイプを考えた場合に、フッサールはその間を歩いているのか、二つに分けてしまうことが間違えているのか、どういう道を歩いていたのか。とりわけて、フッサール哲学にとって人間の知恵というのはどういう役割をするのか。方法についてですけども、それをカンブシュネルさんにお答えいただいた後で、シュテンガーさんにお答えいただきたいと思います。では、カンブシュネルさん、よろしく願いいたします。

カンブシュネル先生 ありがとうございます。一体どこからこういったお話をすればいいのかわかりませんが、もちろん非常に強い類似性があると思います。デカルトの哲学と、フッサールの哲学の間には。特に反省性などについて。それから、通常の見証性と距離をとるとのことなどについて。この点については何度も触れられたと思いますが、ここでももちろん、こういった類似性といったものを全く否定しようというわけではありません。

今、シュテンガーさんのお話を聞きながら、一体どのような違いがあるかと考えておりました。つまり、デカルトの哲学とフッサールの哲学の違いというものについて。今ご質問がございましたが、デカルトの哲学については、物事の操作といった側面を維持するべきだと思います。つまり、これは精神を自ら精神が操作するということと不可分だと思います。ここにおいて、フッサール的な現象学では、ただ見ている人間なわけですが、そして、1つの何かの **genesis**、生成とか構造といったものをそこから生み出そうとしている。必ずしもプラクティックな、実際的な面には入らなくても。

ここで現在、この2つの哲学に違いがあるとしても、もし意味があるとするならば、村上さんの質問に戻しましょう。これはデカルトのライプニッツによる批判です。ライプニッツについては常にフッサール、例えば、**Mathesis universalis** などについては、必ずそういった人たちの哲学が挙げられます。デカルトよりもよくこれについては名前が挙がるわけです。ライプニッツのデカルトに対する批判というのがありますが、ライプニッツはある種の形式性といったものに常に注目しておりました。これは必ずしもデカルトでは前面に出てくるものではないのですけれども、これはスコラ的な哲学に、この形式性といったものにも結び付いてくるわけですが、デカルトはそういったものを取り除いていくこともあるわけです。そういったことをいくつかの点で示すこともできるのですが、いずれにせよ、論理的な必然性、これはデカルトがきちんと習得しているものでありますが、デカルトの直観というのは簡単に批判できると思います。基準がないではないかと。しかし、この知覚 (**perception**) というのは常に必然的なものなんです。ものというのは必ずしも私たちが持っていたものではない。我々が思想について認識するもの、知覚するものは、必ずしも我々に現れているものではない。そういった面において、デカルト的な省察と、論証を分離することはできないんじゃないでしょうか。もちろんそういった論証の形としては、必ずしもすぐ出てくるものではありません。もちろんそういうことを言い出しますと、大変な問題がいろいろとつながってきて、とてもこの、今日の時間では収まりきらないと思います。

村上先生 ありがとうございます。それでは、シュテンガーさんにお答えいただくことにしますけれども、今のカンブシュネルのお話は生活世界の問題とすぐつながっている事柄だと思います。よろしく願いいたします。

シュテンガー先生 ありがとうございます。手短にお話させていただきたいと思っております。今、いろいろなことがお話されました。カンブシュネルさん側のコメントも大変おもしろく伺いました。フッサールとデカルトの関係を指摘されるということは、大変おもしろいと思っております。

フッサールにおきましては、常にデカルト派と見られておりました。ただ、デカルトによって始まったこのフッサールの理論ですけれども、デカルトが見つけたものというのは、

まず、デカルトの規則に関する書物もありますけれども、そのような中に対して、フッサールにおいてはこのような見方が必要だと見ておりましたけれども、しかし、それはただ単に合理的なものではないとしたわけであります。そうではなく、その前の段階で違ったような領域がある。それをテーマ化しなければいけないと思ったわけです。それを示さなければいけないとしました。つまり、デカルトの違いということでは、現象ということでは、客観的な世界が数的なものになっているということです。それが数量化できると、そのような仕方だったわけであります。

ライプニッツに対するデカルトの批判ということで考えると、これは様々な包括的な観点があると思います。ライプニッツにおきましては、近代的な哲学でも大変興味深いと思っております。何が合理的なものなのかということが扱われている様々な書物がありました。ライプニッツとデカルトについては、両者とも大変偉大な哲学者だったと思っております。デカルトが発見したのは、エゴということです。精神的なものが大変重要なものであると、決定的なものであるとしたわけであります。

ライプニッツは二重性、デカルトが言ったことですがけれども、これは正しいけれども、しかし、ある一定のレベルにおいて正しいと言ったわけであります。ライプニッツはその中で、形而上学的な試みをし、そこで試みたことは差別化をするということであります。つまり、デュアルな瞬間はあるけれども、つまり、客観と主観ということですが、そうではなくて、すべてのことを一回に見ることができるとしたわけであります。そういったことを現象学として見たわけです。

それでは何を意味するのかということ、現象学というのは常に生活一般的なものであります。外から見るとということであります。ライプニッツは二つのレベルで現象学を考えていきました。パリのほうからもカンブシュネルさんがおっしゃったように、デカルトの知覚ということは、最終的にはぶら下がっているような機能であるということが言えると思います。これに対しライプニッツに関しては、微小表象というものが現象学として見るができる、あるいは手に取ることがわかるということだと思えます。このような違いがあると思えます。また、デカルトとフッサールの違いは、近代的な主流の流れの中で、新しい条件というもの、前提というものを見ていたと思えます。例えば、『(デカルト的) 省察』のように。

フッサールにおいても省察を取り行われたわけですが、フッサールは大変強い、そして、主観的な、客観的なということでも、大変理性的な研究者であったと思えます。ただ、フッサールは、何かのシステムというものを開発したということはありません。これに対しまして、ライプニッツとデカルトは、ある一つのシステムというものをくり上げた人でありました。そういった意味で、ライプニッツとデカルト、そして、フッサールというのが、違いがあるのではないかと私は思っております。

フッサールは人間を、つまり、志向性ということで大きく包括的に考えたと思えます。『(デカルト的) 省察』においてもそうですし、『危機書』でもそうです。自分に戻っていくとい

うようなこと。こういったことが大変深く、どこから私が、あるいは世界が発生しているのかということを取り扱ったわけです。そういった意味で、フッサールの哲学は知恵ということに関係してくると思います。知恵というものがフッサールの大変重要なテーマであったと思います。

多文化的な問題を言わなかったんですけれども、それに関してはフッサールも取り扱っておりました。これは、比較的なものであり、それは一般的なものではないということでもあります。そういった意味で、フッサールのテーマにはなり得ないということで、これに関しては批判できないと思います。つまり、それだけ取り出して考えるのではなくて、世界の二重性の探究というものにつながっていくと思います。

そして、先ほど最初に村上さんがおっしゃったように、つまり、福島のことですね。それに関して申し上げたいと思いますけれども、つまり、生活世界が理解できないとき、つまり、日常が、あるいは文化的な面で、あるいは芸術的、宗教的な面で理解できない場合、そのとき、基本的な概念、例えば、自然理解ということは全く違った見方になると思います。つまり、デカルト、フッサールが無批判的に受け止めていたもの、これは主観的なものでありますけれども、ということです。このような問いというのは、どの範囲で、例えば、東アジアの文化が、この主観性というものが、つまり、ヨーロッパの場合は第一義的な意味があるわけですが、これの関係と、それから、自然の理解というものの関係がどういうものかということが重要になってくると思います。多分中間的なソリューションになるかもしれません。つまり、基本的な概念をどういうふうに受け止めるのか。そして、自然というもの。どういう自然かということですが、ヨーロッパ的な自然なのか、それとも、東アジア的な自然なのか。そして、アジアの場合と……。

村上先生 ありがとうございます。申し訳ないですが、シュテンガーさんとカンブシュネルさんには、お昼ご飯が過ぎてしまっているんで、お腹が空いていらっしやる。こちらは夜ご飯なんですけれども、それで、もう時間があまりないので、今のシュテンガーさんのご意見について、カンブシュネルのほうから何かございますか。カンブシュネルさん、よろしいですか。

カンブシュネル先生 そうですね。今、シュテンガーさんがおっしゃったことには同意できる部分があります。例えば、どうしても現象学的なインスピレーションが必要であるということ。特に現在のような問題を前にしてそれが必要であるということ。こういった意味では補完性といったものがあるのではないのでしょうか。二つが一緒の統一というよりも、両者には補完性がある。つまり、一方では現象学の教訓とデカルトの方法論の間にはそれぞれ有益性があり、あわせて補完的なものだと思います。それから、私たちの自らの経験の現象学的に捉えていくということ、随分多くの分野でできると思います。つまり、デリダなどでもそういったことがはっきり出てきますが、我々は証人、証言 (témoignage)

が必要です。多くの証人が必要である。証言が必要である。数多くの分野、人生の生活の大きな分野において、それから、世界の大きな地域において、人々が語らなくてははいけない。そういった面に関して、現代の意識、良心というのはあまりにも貧しいのではないのでしょうか。こういった我々の生活の現象に対して、あまりにも貧しすぎる。

もう一つ、いろんな問題に取り組まなくてははいけないと思います。デカルト的に取り組むべきです。つまり、現代には数多くの問題があります。すべての分野、例えば、色々な制度だとか実践において色々な問題がありますが、そういった中で非常に合理的な仕方です。予測して修正することを要求することができるわけです。どのようにものが機能しているかということなどに関して、私たちはまだやるべきことがあると思うのです。もちろんそういうときに、どこまで大きな、膨大な、科学的な、技術的な機械が、現在我々によって制御することができるか、今までは、少し変えて今までのような科学の生産だとか、技術の生産といったものを、今までと別な形に持っていくということ。これは考えられないことではないと思います。想像することが可能です。しかし、我々は責任を持っている。生活の様々な面において、地球全体において責任があり、我々の共通の務めというのは、そして、我々哲学者の務めというのは、もちろん現象学的なインスピレーションであろうと、デカルト的なインスピレーションであろうと、こういった言説に直面するという。そして、ある種の責任をきちんと主張していくことです。

村上先生 ありがとうございます。もう時間がございませんので、最後に1問だけ、山口さんのほうからご質問いただいて、それに、申し訳ないんですけども、お二人に簡潔に答えていただいております。おしまいにしようと思います。

山口先生 今回、普遍数学の方法論的意味が問題にされているんですが、興味深いことに、お二人とも数にすることのできないという制限を、数にすることができないことという制限を設けていらっしゃいます。そもそもその知恵というか、その直観は、デカルトにおいて、あるいはフッサールにおいて、そもそもどこから来ているのか。なぜかという、現在見られるように、自然科学は当然ですが、数学を基礎にして出来上がっている科学です。それに対する1つの制限をかけるとするならば、数で表しうるものの限界はどこまであるのか、どこまでなのかということについての学問的な限定付が明確でなければならないと思います。その点について、お二人にそれぞれデカルトから見た数による接近の限界、そして、フッサールから見た数によって表すことのできない限界というのは、一体全体どこから来ているのかという、どこを説明していただきたいと思います。

村上先生 今度はシュテンガーさんからお答えいただけますか。シュテンガーさん、よろしくお願いたします。

シュテンガー先生 ありがとうございます。まず、どこに制限があるのか、限界がどこにあるかということですね。二つ質問があったと思いますけれども、まずは発見に関してですけれども、カントは大きな発見をしたと思うんですけれども、つまり、数学、そして、数式あるいは考えるということです。それ以外は、重要でないということ。それは大きな発見でした。それについてはっきりしますのは、どこまでが客観化できるか。また、数学化できるかということ。しかしながら、その際、フッサールは主観の客観化ということに関しては扱わなかったわけです。この構造というのは、私どもが今日持っている問題、例えば福島などの問題ですけれども、これは純粋に、このような機能的な、そして、客観化可能な、そして数学的なアプローチはできないということでもあります。把握できないということでもあります。つまり、問題はもっと深いところにあるということです。このことを私どもは認識していると思います。そして、このような考え方というのは、フッサール、あるいはハーバーマス、あるいはカントまでではないです。つまり、これは生活世界を合理化するということでもあります。つまり、このような世界をコピーすることができるわけです。

二つ目の山口先生の問いでありますけれども、フッサールはどういうところに限界を見ているかでありますけれども、彼は、山口さんがおっしゃったように、これは山口さん、よくわかっていると思いますけれども、例えば、空間や時間の問題、あるいは受動的総合の問題。つまり、受動的な問題。そして、受動的につくる、あるいは総合するということ。このことに関してもっと詳しく見ているわけでありますけれども、このことが明らかにしているのは、つまり、全く合理的な、純粋な合理性というのは限界があるということをは言っているということです。ありがとうございました。

村上先生 それでは、カンブシュネルさんお願いいたします。

カンブシュネル先生 私は次のことだけを強調しておきたいと思います。一点だけ。ここでの問題、今の主要な問題というのは、数学化の問題ではない。つまり、自然科学における数学化の問題ではないのではないのでしょうか。もちろんそのレベルは分野によって、数学化のレベルは分野によって違うと思います。むしろ問題というのは、数量化の帝国と言いますか、社会科学、人文科学において数量化といったもの、数学化というのは、非常に帝国主義的に広がっているということだと思います。例えば、経済などでも。それが真実かどうか、数学的なデータを我々は入手して、それが真実かどうかという問題ではなくて、そういったものに常に数字ばかりに傾倒してしまうということ。数量的なアプローチばかりに依存してしまうということ。盲目的にそういった形で、対象となる現象を把握してしまうということ。人文科学や経済科学、社会科学の分野では、どうやって数字、本当にすぐ数字を扱いたくなるということ。これは結局、判断することを諦めることにつながっていくのです。例えば、どこに権威的な決定が、そして、ひょっとしたら専制的な決定が、

データを使うことによって決定が入ってくるのではないのでしょうか。先ほどの点に戻りま
すけれども、シュテンガーさんと同意できると思うんですが、デカルト的な考えを、ある
いはフッサールの考えを喚起するということ。これはどちらも判断を求める、そういう
思想だと思いますので、その点だけ強調しておきたいと思います。

村上先生 ありがとうございます。長時間にわたってお二人に協力していただいて、こ
ちらの、そちらに映っているかどうかわかりませんが、たくさんの方が興味深く参
加していただきました。その方々にもご質問いただきたいんですけども、不手際で、時
間がなくて、これでおしまいにすることにいたします。どうもお二人、ありがとうござい
ました。

初めてのことで、いろいろ不手際もあったと思いますけれども、多くの方にいらして
ただけで、大変心強く思います。また、12月17日に井上円了ホールで、ジャン＝リュック・
ナンシーさんとヴァルデンフェルスさんの講演会を行いますので、もう少しこちらの対応
もうまくできるようになっていると思いますので、ぜひいらしていただきたいと思
います。今日はありがとうございました。